

令和7年産米の作柄と次年度対策

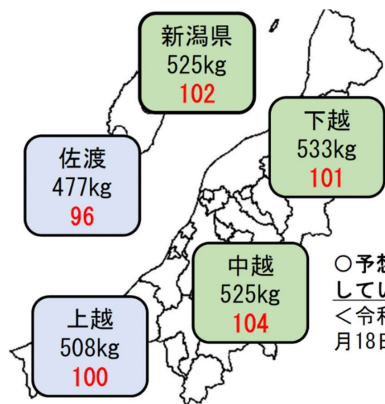
1 令和7年産米の作柄と品質

本年の稲作は、7月の高温と無降雨に象徴されるように、米づくりにとっては大変難しい年となりました。用水確保に向けて苦労の多い年であるとともに、早生を中心に品質は著しい不良となりました。

(1) 作柄

北陸農政局が11月に公表した令和7年産米の作況単収指数は、新潟県で102（やや良）、下越で101（並）でした。阿賀野市の作柄はやや良と推定されます。6月から7月にかけて高温少雨の天候となり、用水が確保されている地区では生育が早まって、穂数や一穂粒数が多くなり、これが単収向上につながりました。

しかし、連続無降雨で用水確保が困難であったため渇水被害が発生し、作柄には地域差が大きく現れました。



○予想収量、作況単収指数は農家が使用しているふり目幅ベース(1.85mm)
<令和7年10月25日現在、北陸農政局11月18日公表>

(2) 品質

品質は、中生・晩生品種では平年に近い1等比率を確保したものの、早生は著しく低下し、特にこしいぶきでは1等比率が10%を割り込むかつて経験のない品質不良となりました。

7月の無降雨を伴う渇水被害との関連もありますが、広く市全体の傾向として確認されました。渇水被害があったのは、国道290号沿いの地域で、葉巻き症状や出穂遅延が報告されました。

表-1 主要品種の1等比率
(R7、阿賀野市)

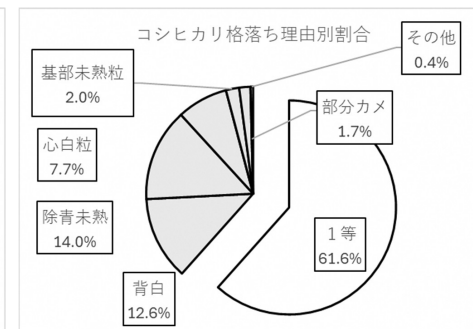
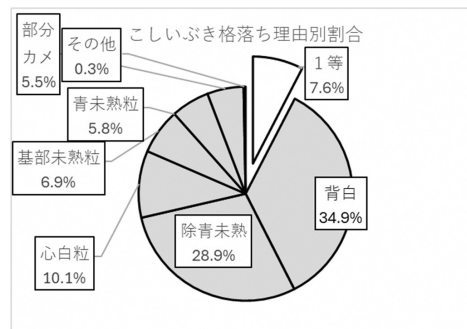
品 種	1等比率 (%)
コシヒカリ	61.6
こしいぶき	7.6
新 之 助	99.3
ゆきん子舞	44.5
こがねもち	11.5
越 淡 麗	100.0

2 品種別1等比率と格落ち理由

品質低下の要因をみると、こしいぶきでは①背白粒（34.9%）、②除青未熟粒（28.9%）、③心白粒（10.1%）、④基部未熟粒（6.9%）の順となっています

（格落ち率は、総出荷量に対する割合で示してあります。）

また、コシヒカリでは①除青未熟粒（14.0%）、②背白粒（12.6%）、③心白粒（7.7%）の順となっています。



3 白未熟粒発生の特徴

格落ち理由のうち、いわゆる「白未熟粒」は、登熟期の高温に遭遇したり、窒素不足になったりすると発生しやすくなるといわれています。

表-2 被害粒の種類と要因

被害粒名称	発生要因	被害時期
除青未熟粒	登熟後期悪環境、過剰生育（粒数）、水分不足、倒伏、地力・肥料不足、病害虫被害	登熟後期
白未熟粒	乳白粒 高温、粒数過多、低日射、倒伏、水分不足	出穂後 14-15 日
心白粒	高温、粒数過多、低日射、倒伏、水分不足	出穂後 10 日
腹白粒	高温、粒数過多、低日射	出穂後 21 日以降
背白粒	高温、低窒素濃度	背白は出穂 1-14 日、基白は 16-24 日

本年は6～8月にかけて異常な高温を記録しました。しかし、8月に限ってみると降雨が多かったことから、必ずしも登熟期間を通して高温が続いたわけではなく、品種や出穂期によっては高温の時期を避けて、品質を維持した例も見られました。

そこで高温に対して最も弱いとされる出穂後 10～14 日の気象条件について検討しました。

阿賀野市におけるこしいぶきの出穂期は7月23日頃とみられ、この10～14日後の気温を見ると、8月2日～6日頃がこの時期に当たり、高温の時期を避けられなかったとみられます。

4 後期栄養の検討（葉色の推移）

こしいぶきの葉色について、7月下旬以降の推移をみると、平年と比較して3ポイント程度低く、この傾向は出穂15日後まで続きました。

特に7月下旬の渇水期における葉色低下が大きく見られたのが特徴です。

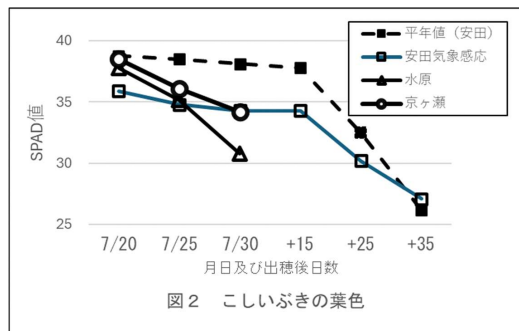


図2 こしいぶきの葉色

こしいぶきの幼穂伸長期における葉色は35～37ポイント、出穂期で35ポイントが望ましいとされているので、この時期における葉色低下の影響は大きかったとみられます。

5 出穂期と高温の遭遇時期

本年は、8月に降雨が多かったことから、必ずしも登熟期間を通して高温が続いたわけではありません。水稻の高温感受性が高いとされる出穂後10～14日の期間に重要なポイントがあります。

阿賀野市におけるこしいぶきの出穂期は7月23日頃とみられ、この10～14日後（8月2日～6日頃）の気温を見ると、最高気温で35℃、平均気温で20℃前後となり、高温の時期を避けられなかったとみられます。

こしいぶきの出穂期と異なる時期に出穂したコシヒカリや新之助では大きな品質低下はありませんでした。

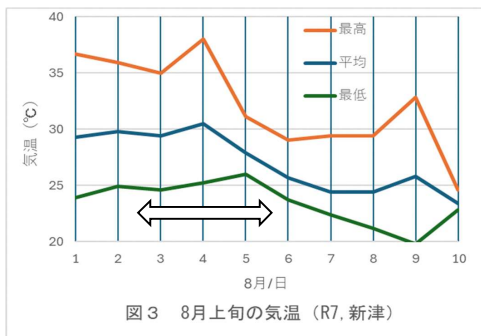


図3 8月上旬の気温 (R7, 新津)

6 まとめ

以上の検討から、①土づくり等地力の向上、②穂肥の適切な施用による後期栄養改善が重要と考えられました。

7 次年度対策

本年の反省を踏まえ、暑さに耐えられる稲づくりをめざしましょう。

（1）異常高温対策 ～幼穂形成期以降の栄養管理～

全量基肥でも穂肥の施用ができる準備をしましょう
流し込み肥料やドローンによる穂肥を活用しましょう
高温年は出穂直前穂肥も効果的です

（2）健苗の育成と初期生育の確保 ～徒長苗防止～

田植え時期から逆算した播種を計画し、ハウスの温度管理を徹底しましょう
深植えとならないよう、植え付け状態を確認しましょう

（3）倒伏防止対策 ～生育診断～

中干し、溝切を徹底して、しっかりと根を張らせましょう
穂肥前には、生育診断で（幼穂や草丈を確認して）適正な穂肥を施用しましょう

（4）水管理の徹底

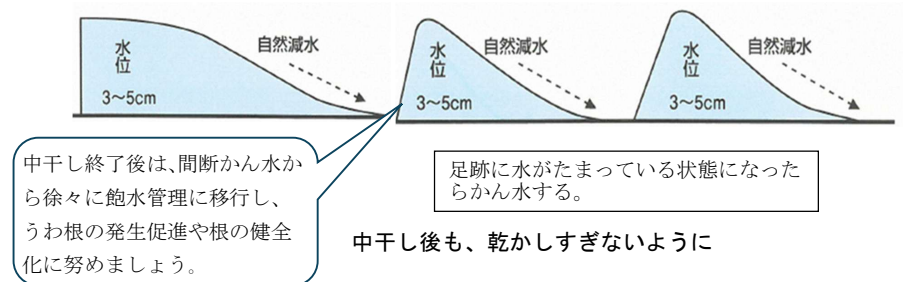
中干しは出穂の30日前までに終了しましょう
中干し後は間断灌水、幼穂形成期以降は飽水管理を保ち、乾かしすぎない

（5）収穫遅れ対策

適期刈り取りの範囲は1週間程度、籾黄化率85～90%で刈遅れしない
早生、中生、晩生の組み合わせで、リスク回避

（6）斑点米発生防止対策

畦畔除草の実施と出穂期に合わせて適期の防除をしましょう
いもち病、紋枯病、ごま葉枯病などの多発生ほ場では、個人防除で予防しましょう
ごま葉枯病多発生ほ場では土づくりも大切です



8 今夏の渇水を踏まえた田面の漏水等防止対策について

渇水により亀裂が生じた田は、放置することにより、来春の用水通水後の畦畔崩壊や、漏水による用水不足を発生させる恐れがあります。この様な被害の防止対策の一例を紹介するので、ご自身のほ場の状況に応じて、適切な対策を実施し、来年度の営農の安定に向けた参考としてください。

（1）漏水による栽培への影響

- ・亀裂への水の侵入により畦畔崩落が発生する恐れがある
- ・田植え後に水がたまりにくいことで、地温が上がらず、初期成育が遅れる
- ・肥料成分が流出しやすい

（2）漏水等防止対策の一例

A_トラクターによる漏水対策

- ・秋耕を行った後、排水口を閉じて雨水を保持し、丁寧な代掻きを2回以上実施する
- ・畦畔際を中心に大きな亀裂が生じた場合は、トラクターで何回か走り、タイヤで土を鎮圧する

B_ベントナイトによる漏水対策

- ・亀裂の入った畦畔際1m間に対して、ベントナイトを投入し、作土とよく混ざるようにロータリーで耕起する